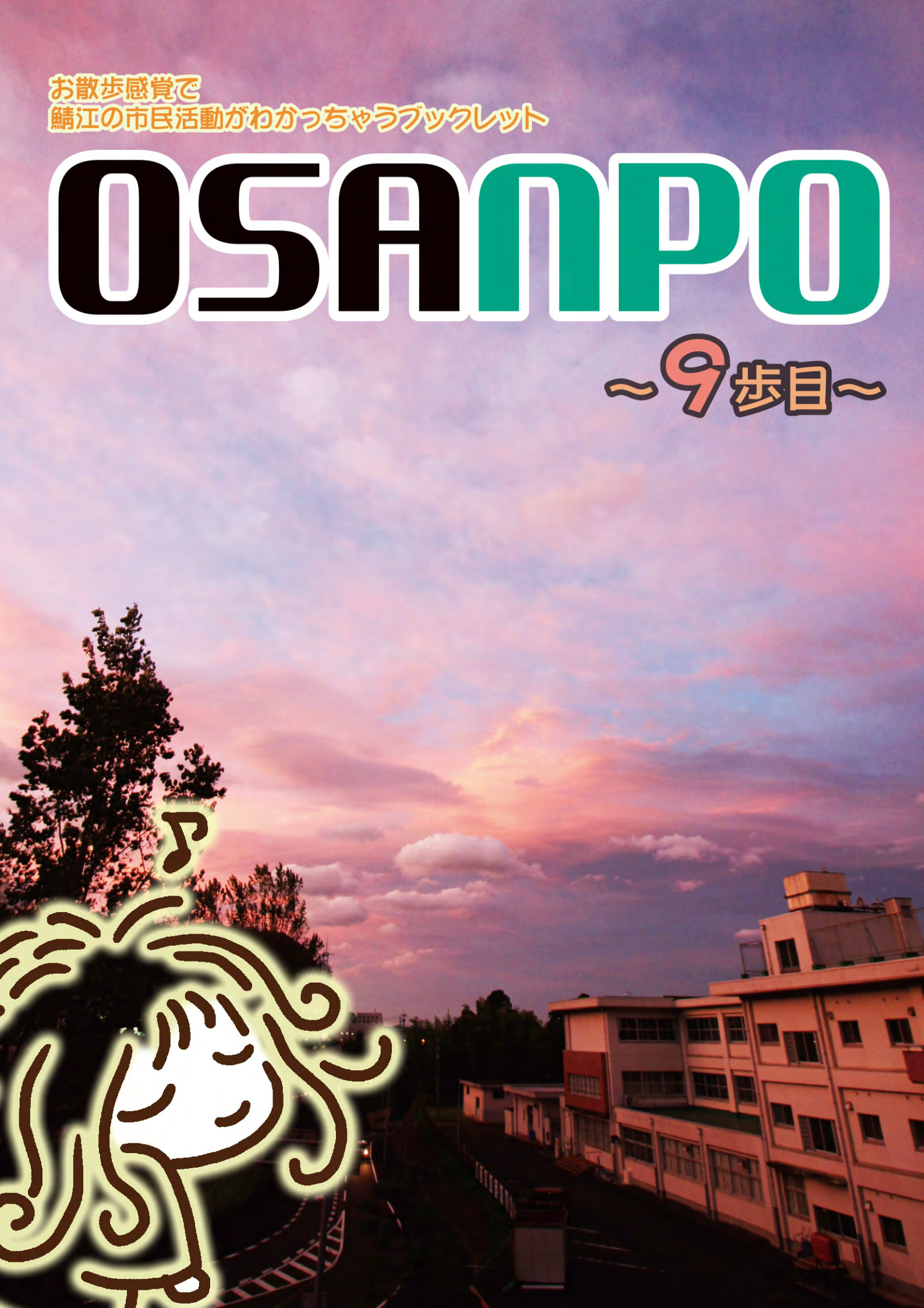
お散歩感覚で
鯖江の市民活動がわかっちゃうブックレット

OSANPO

～9歩目～



目　次

緊急企画「コロナ禍での市民活動について
いろいろお聞きしました！」　４ｐ－７ｐ

コラム「コロナが開けた箱」　８ｐ－９ｐ

SAVE JAPAN プロジェクト
「ランドスケープ大作戦カードゲーム」　１０ｐ－１１ｐ

巻末特集①「サバヌシ総会２０２１」　１２ｐ－１６ｐ

巻末特集②「チラシ＆ポスターで振り返る
今年度のさばえＮＰＯサポート」　１７ｐ

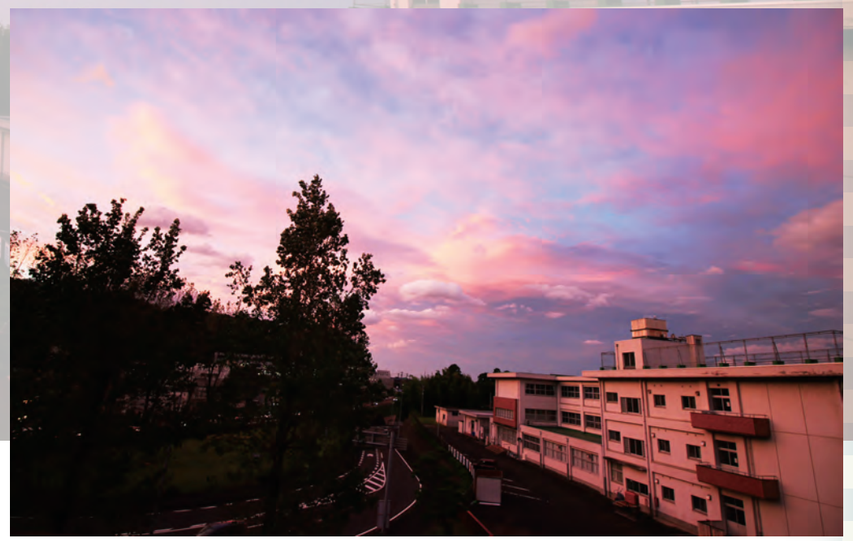
編集後記座談会　１８ｐ－１９ｐ

『OSANPO』について

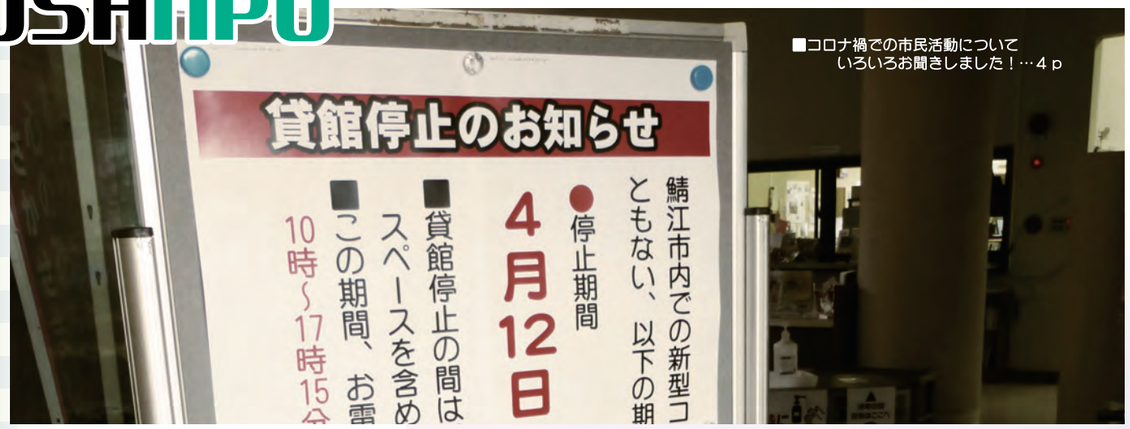
■ぶらり“お散歩”感覚で、さばえのNPOや市民活動のことが、気軽に楽しくわかる…それが、「OSANPO」のコンセプトです。

■タイトルに隠れた「NPO」(非営利で活動する組織)は、実は身近な存在で、その気になれば、今すぐ、誰でも参加することができます。

…そう、まるで“お散歩”のように☆…



OSANPO

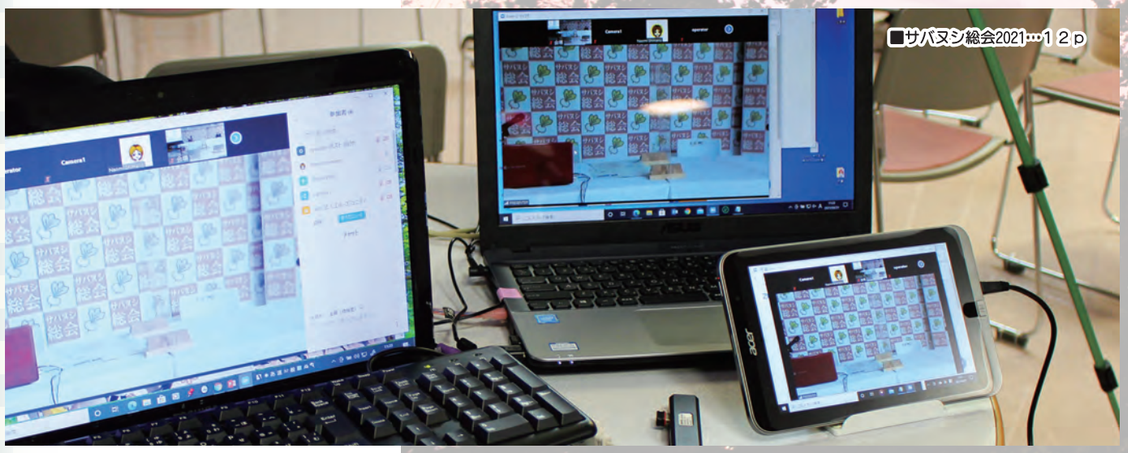


■コロナ禍での市民活動について
いろいろお聞きしました！…４ｐ

Pandora's Box

■コラム「コロナが開けた箱」…８ｐ

■ランドスケープ大作戦カードゲーム…10ｐ



■サバヌシ総会2021…１２ｐ

■編集後記座談会…１８ｐ

■チラシ＆ポスターで振り返る
今年度のさばえＮＰＯサポート
…１７ｐ

◆緊急アンケート企画◆

コロナ禍での市民活動についていろいろお聞きしました！

この度、新型コロナ影響下での市民活動についてアンケートを実施し、地域の市民活動団体の現状などについて簡単にまとめてみました。
それぞれの状況を共有することで、今後の活動の参考にしていただければ幸いです。
◆実施内容◆…依頼団体：約60団体／回答団体：29団体／調査時期：令和3年3月

2019年の末に確認され、全世界でまん延し始めた新型コロナウィルスは、私たちの住む地域でも例外なく影を落とし、いろいろな生活様式を変えてきています。

さばえNPOセンターの指定管理を担う我々さばえNPOサポートも、施設運営を行う上でいろいろな変革を迫られ、否応なく対応してきました。

様々なイベントも、のきなみ中止。まさに世界も地域も様変わりした1年という印象です。

この『OSANPO』も、例年なら団体の皆さんに直接インタビューを行い、その雰囲気や本音を感じ取って記事を完成させるわけですが、取材そのものが難しい状況に。

そのため、少し変則的な誌面作りに挑戦することになりました。

いわゆる「コロナ禍」の中、地域で頑張っている市民活動団体の皆さんはどうだったのか。

どのようにこの1年間を過ごし、活動していたのか等、率直な声を聞かせていただく目的で、コロナ禍での市民活動についてのアンケートを実施しました。

鯖江市を中心に、過去の誌面に登場した越前市の団体にもお願いし、短い期間ながら、ほぼ半数の回答をいただくことが出来ました。

大変お忙しい中、ご協力をいただいた皆様に深く感謝申し上げます。

◆5つの設問

アンケートでお聞きしたのは、次の5つの項目です。

①令和2年（2020年）度、団体としての活動はどれくらい出来たか

②これからの活動計画について

③コロナ禍での活動で当てはまること（対応や変更等）

④コロナ禍だからこそ「出来たこと」「気づいたこと」「考えたこと」

⑤コロナ禍の期間に、何か「変わったこと」「始めたこと」

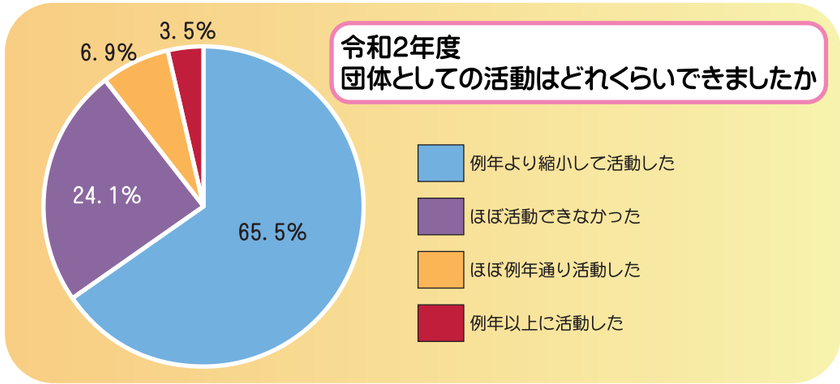
①②④の項目は、答えやすいことを重視して4択に。

③も12の項目から自由に選んでもらう「複数回答形式」です。

⑤および①～④の各コメント欄には、回答者の意見や詳しい内容を、自由に書き込めるようにしました。

◆厳しい活動状況

最初の設問では、誰もが初めて直面した「コロナ禍での市民活動」について、実際どうだったのかをお聞きしました。



予想していたとは言え、**「例年より縮小しての活動」と「ほぼ活動出来なかった」**が全体の9割近く。つまり、ほとんどの団体がいつも通りという訳には到底いかなかったと言うことがよくわかります。

コメント欄のいくつかを紹介します。

・高齢者向けの活動がほぼ中止。

・地元向けの活動はオンラインを含めて実施したが、県外の企業向け事業などは一切出来ず。

・活動拠点の施設が使用禁止になった。

・介護施設関係の訪問活動などが出来なくなったが、利用者との関係維持のためにマスク配布を行った。

さばえNPOセンターでも利用制限や臨時閉館の時期がありました。活動する「場所」がなくなるというのは団体にとって厳しい状況です。

県境をまたいだり、大人数が集まる事業は実施が難しく、リモートやオンラインの活用にシフトした団体も多くありました。

特に会議のオンライン化についてはかなりの団体が導入している様子で、まさに令和2年度は「オンライン会議元年」と言えるのではないでしょうか。

聞くところによれば、在宅ワークが増えたため、環境を整えるための家具や雑貨が多く売れたとか。（そう言う私もタブレットスタンドとマグカップを新調しました。）

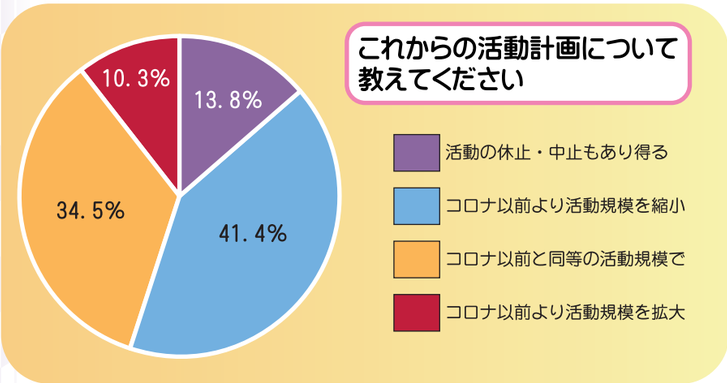
また、保護された犬猫の譲渡（里親マッチング）事業などには、孤独やストレスからか、例年より多くの応募があったそうです。

ただ、福祉関係で人と接触する活動が主体の団体では、消毒や防疫対応で負担が増えたとの話も耳にします。

また、インターネット活用には、必要な環境や知識の有無が重要なため、いわゆる「情報弱者」と呼ばれる皆さんへのアプローチは大きな課題です。

◆予断は禁物ながら…

次に、令和3年度以降、どのような活動規模で計画中かをうかがいました。



グラフのように「コロナ前より縮小」と「コロナ前と同等」の団体が拮抗して多めです。

感染状況が収束する時期をいつ頃と考えるかでも回答が変わる質問ですが、今後の感染状況による流動性を考えざるを得ないので、ある程度臨機応変な対応を求められることを覚悟している様子も伝わります。

以下、コメント欄から。

・活動の本質を変えず、内容を見直す。

・活動の休止・中止ではなく、コロナ感染防止策を考慮した活動を計画。

・事業の対象や場所を、感染しにくい年代層、環境となるようにする。

・参加者を少人数として、活動時間も短くする。

・リモート・オンラインの活用。

・活動規模を拡大しないと継続出来ないので、営業に力を入れる。

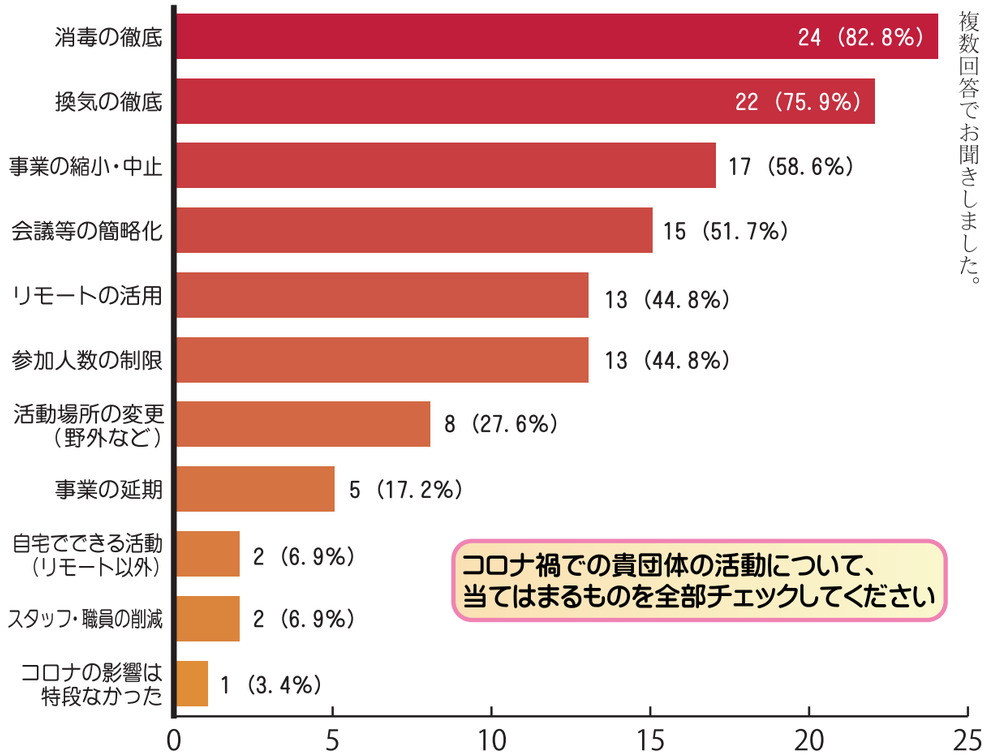
ただ受け身の対応というのではなく、出来るところから少しでも事業を見直すといった攻めの気概を、少なからず感じ取ることが出来ました。

「本質を変えず」のフレーズは、NPOとして譲れない視点ですね。勉強になります。

◆緊急アンケート企画◆

◆出来ることは何でもする！

3番目の設問では、令和2年度の活動を行うにあたって当てはまるものを複数回答でお聞きしました。



リアルなイベントでは「消毒」や「換気」「人数制限」など、現場で出来る基本的対応を取りながら事業に臨んでいる姿がわかります。

具体的な声は以下の通り。

- **リアルでの事業をオンラインによる事業に変更して実施した。**
- **ＹｏｕＴｕｂｅの動画制作、ブログ、広報活動に注力した。**
- **小さな会場にし参加人数を減らしたことで、参加者の一体感が増した。**
- **集客する手法から、展示で「見る」「触れる」「考える」形に見直した。**
- **職場のメンバーをグループ分けして、管理出来る体制を作った。**

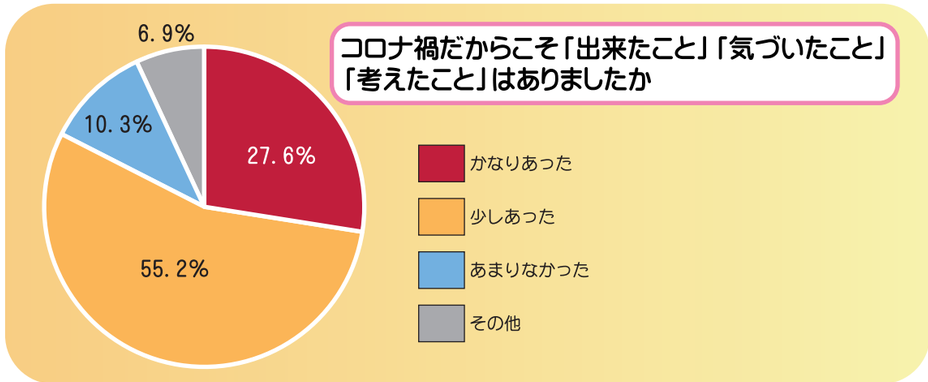
ピンチはチャンスという言葉があるように、制約の中、いろいろなアイデアを模索しての活動が見て取れます。

今まで当たり前だったことを、この機会に立ち止まって見直す。…そんなチャンスとしてとらえた団体も思った以上にあったのかもしれません。

◆あらたな「気づき」

少し変化球ですが、4番目はコロナ禍というイレギュラーな社会背景で得られた、ポジティブな「何か」があったかどうかの設問です。

「なるほど」という内容のコメントもたくさんありました。



全体の8割以上の方が、少しまたはかなりあったとの回答でした。

具体的な声のいくつかを紹介します。

- **オンライン、リモートの可能性。**
- **オンラインの活用が、コロナ以外の災害（大雪）でも活かされた。**
- **信頼、協力の大切さに気付いた。**
- **活動に対するやりがいを意識した。**
- **情報発信の重要性。**
- **充電期間・準備期間として、今まで出来なかったことに時間を使った。**
- **自分たちの事業が感染拡大につながるかもと考え、社会への個々の行動の影響力を再認識した。**

それぞれの団体で、受け持つ分野や目的は違っていても、その活動は人と人のつながりで出来ています。

お互いの信頼感や、やりがいは、市民活動やボランティア活動の中心にある大事なこと。

いわゆる「非常事態」で団体や自分自身の足もとを見つめたことが、多くの気づきとなったのかもしれません。

そうした活動の目的の共有やお互いの信頼関係の大切さに、私たちも気付かされた1年でした。

◆変化と持続

最後の設問は、コロナ禍の期間に（個人的なことも含めて）何か「変わったこと」「始めたこと」についての質問です。（記述式）

- **今必要なことは何かを考えるようになった。**
- **目的と意義をしっかりと考えるようになった。**
- **熱、体調に気を配るようになった。**
- **個人的にはＺｏｏｍを始めた。**
- **デジタル化、アーカイブ化。その他の整理整頓も。**
- **運動不足、視力の低下。**
- **読書と、アウトプットとしてブログを書く習慣ができた。**
- **会議の質の向上を意識するようになった。**
- **消毒、マスク着用、飲み会の自粛。奥さんとの家飲み。**

実際、変わったこと、そこで考えたことは、もっともっとたくさんあるのだろうと思います。

また、残念ながら、明日突然新型コロナウイルスがなくなるということもないでしょう。

我々さばえＮＰＯサポートの広報委員会でも『ＯＳＡＮＰＯ』発刊に向け、コロナ禍での市民活動について、いろいろと話し合いました。

市民活動の立場から、感染症の影響を、どんな視点で見つめ、誌面に打ち出して行くべきなのか。

少なくとも世間的には「負けるもんか！」と果敢にコロナ禍に立ち向かう人もいれば、どうにかバランスを取りながら「経済のためにできること」にチャレンジする人もいます。もちろん、それ以外の立場で発言や行動をする人も多種多様です。

今回のアンケートでも、それぞれの団体・個人ごとに、皆さんが様々なスタンスで現状と向き合っているのが伝わってきました。

もちろんコロナ禍の今、何もしないで過ごしていれば良いとは思いません。

かといって、私たちは決して「頑張らなきゃダメ！」という事をお伝えしたいわけでもありません。

どちらかと言えばその逆で、持続可能な市民活動であるために、当事者の皆さんが必要だと思うのであれば、この状況を「充電期間」や「休息」あるいは「自分（団体）自身を見つめ直す時間」ととらえることも「アリ」だろう。そんなふうに思っています。

❀　❀　❀

市民活動やボランティア活動は、本来、自分の「思い」からスタートし、同じように社会や関係者の多くの「思い」が集まって動くものです。

何かを「するべき」という考えに囚われ過ぎて、誰かの「思い」を犠牲にしてしまいそうなら、そこは一旦足を止めて周りを見渡してみるのも、市民活動では大切なことかもしれません。

団体ごとに降りかかった影響に濃淡があるように、きっと、それぞれが見つめて進む方向にも、全員に共通する「正解」があるとは限らないのだろうと思っています。

そんな視点も含め、今回の緊急アンケートに寄せられた声を通して、読者の皆さんに何かしらのヒントや共感が残ること、そして、これからの活動の一助となれば幸いです。

コラム

コロナが開けた箱

～NPOの視点で「希望」を考える～

認定特定非営利活動法人　さばえNPOサポート
理事長　八田　登師男

■はじめに

昨年1月に日本で最初の新型コロナウイルス感染者が確認されて1年数ヶ月が経過しましたが、コロナ禍はいまだ終息の目途が立っていません。

日々刻々と変化している新型コロナウイルスの感染状況の中で、このコラムを掲載した『OSANPO』が上梓される頃のことは想定できませんが、少しでも明るい兆しや見通しがあることを期待して止みません。

■コロナ禍での社会（家庭）の変化

さて、繰り返し呼びかけられ求められる「不要不急の外出自粛」や「会食制限」など、そしてそれらに対応することでの「巣篭り生活」などからもたらされる疲弊感や閉塞感が、感染症とは別にコロナ疲れとなって社会に蔓延し、さまざまな悪影響をもたらしてきています。

経済の面から見ると、一部好調な業種もありますが、社会全体としては、個人消費の落ち込みからの経済停滞と企業業績の悪化に伴う解職や就業シフトの低密度化等による収入減などにより、新たな貧困層が生み出されるなどの事象も発生しています。

また、「新型コロナウイルスに感染するのは、軽率な行動や自身の注意不足によるもの」との社会的風潮となり、自己責任（「自助」…自立・自律→自分のことは自分でする、解決する）を強く追及されるようになってきたように思われます。

そのような風潮が「自粛警察」や感染者に対する誹謗中傷の発生につながったものと考えられます。

しかしながら、コロナ禍による社会形態・生活様式の変化がある意味強制的に行われたことから、怪我の功名的に変化が促進されたこともあります。

そのひとつに、在宅勤務やリモートワークの有効活用によるワーク・ライフスタイルの変化が助長されたことが挙げられます。

「どうせ職場を離れて仕事をするのなら、1㎞離れていているのも100㎞離れているのも同じ」と言うことで、「自宅で子育てしながら・介護をしながら」などの「ながら仕事」ができたり、環境の良い場所を選んで（そこに引っ越して）仕事をしたりなど、より人間らしく、その人の実情に応じた仕事の仕方を選択できたりするようにもなりました。

これらのことは以前から提唱されていたことではありますが、実践できる企業や人はなかなか増えませんでした。

それがコロナ禍によりいっきに拡大したことは評価すべき点だとは思いますが、やはり人間も外圧が無ければなかなか変われない生物なのかなとも思わされることがらでした。

■NPOへの影響

さてそんなコロナ禍で、NPOにはどのような変化があり、対応を迫られたでしょうか。

まず（NPOに限ったことではありませんが）「三つの自由を失った」と言われています。

それは、**「移動の自由」**・**「対話の自由」**（これのみはweb等で可能ですが）・**「集会の自由」**です。

NPOは組織ではありますが、最も**人くさい組織**です。行う事業についても、集会・対面型のものがほとんどです。

先に「対話の自由の制限についてはwebで可能」と記しましたが、これもweb上ではその場の雰囲気とか一体感等の感覚を共有することはできません。

そのような中、中止せざるを得ない事業がありながらも、会議はZoomで、事業はZoomと会場のハイブリッド形式や屋外で人数を絞って実施するなど、各団体とも工夫を凝らしながら行っておられます。

また、一方では福祉型や店舗型のNPOは事業内容の縮小や休止等をせざるを得ず、一般事業者と同様に持続化給付金等の制度を活用しながら組織維持を図っておられるところもあります。

そのような中ではありますが、コロナ禍による社会・経済変動による新たな貧困層の方々に対応するためのフードドライブ事業や、人との接触を控えるためにドライブスルー方式での子ども食堂の運営、マスクの欠乏時にマスクが余っているところから足りないところへ再分配する事業など、NPOが工夫を凝らして、機敏かつ柔軟に対応していました。

■NPOが今後取るべき対応

NPOの要件の一つに**「先進性」**があります。

今コロナ禍により新たに生じた社会的隙間や、コロナ禍への対応で新たに作られた制度の狭間などにはまり込み、困難に瀕している方々もおられます。

そんな方々の現状には、ボランティア・NPOでしか気づくことが難しく、また対応することができません。

実際これまでにも、市民の働きかけにより、NPOが行っていた事業が、行政の施策や制度となったものも少なくありません。

先の見えないコロナ禍の中、これからも予想できない、さまざまな社会的変動はあるでしょう。

しかしながら、社会的必要性があって生まれるのがNPOとも言えます。

新たな社会変動により困難に直面された方々（動植物も含めて）を支援・救済するためのNPOが出現することは間違いありませんし、NPOを構成する私たちもそのような目を持ち続けなければならないと思っております。

また、先にも記しましたがコロナ禍によりデジタル化が進み、会議や対話活動・相談等はZoom等の活用で場所を選ばずにできるようになりました。

このことは、新たに開拓・標準化された手法による活動幅の拡大と手法の方向修正と言えます。

ワーク・ライフバランスへの配慮は必要ですが、例えば子育て中の方でも、会議や講座にリモート（在宅）で参加できる可能性が生まれてきます。

このように新たな層の参加と獲得がデジタル化により可能となったことは、NPO・ボランティアにとってとてもありがたいことで、そのような方々が活躍できる場を提供できるよう努めなければならないと思っております。

■「自己責任」と「共助」

冒頭「新型コロナ感染は自己責任との風潮が強まってきた」と記しました。

あたりまえですが、感染者全員が注意不足や軽率な行動をとっていた訳ではありません。

ワクチン接種はもちろん、状況把握や施策が万全でない現状では、推奨されている感染防止対策をきちんと行っていても罹患することは当然あります。

ましてや感染者ひとりひとりの事情や心情を、他人が理解するのは不可能と言ってもよいでしょう。

それにも関わらずくり返される感染者への誹謗中傷は、それを叫ぶ人の知識と想像力の不足を露呈しているとしか言いようがありません。

そもそも百歩ゆずって自己責任の部分があったとしても、それを他人が責め立てる行為はリンチと同じで、社会的にも法律的にも容認されないものです。

もしかすると「自粛警察」的な行動をする方々の中には「自分は社会と正義のために、自発的・無報酬で頑張っている！」と、ボランティアを自負する向きもあるかも知れません。

ただ「押しつけボランティア」という言葉があるように、多様な価値観を認めない行為は、決してボランティアとよべるものではありません。

カラオケ店に闖入し写真をSNSに投稿したり、パチンコ屋に入る人をweb上で告発したりすることは、社会的な風潮を後ろ盾に、個人やお店を攻撃する「価値観の押しつけ」であって、お互いを尊重する「公共」や「共助」の世界とは相容れないものなのです。

ここで何が言いたいかというと、**自己責任**と言うのは、本来、**自身を律するために課すもの**で他人に求めるものでは無く、さらに言えば（自身の不完全さを認めた上で）「一緒にやって行こうよ」「お互いさまだね」「お願いね」「うん、いいよ」と言い会える、「共助」（＝みんなで助け合える）社会を構築していくための言葉として捉えるべきだと言うことです。

また、多様な価値観ということであれば、「公共」の概念や価値観も時代によって変遷しています。

1930年代から60年代に行われた『無らい県運動』（ハンセン病患者の隔離政策）や、1948年から1996年まで存在した『優生保護法』（障がい者等の強制不妊手術を可能とした法律）などは現在では悪名も高く差別的視点を指摘されていますが、これも「公共の利益」の名のもとに施行されたものでした。

しかし現在は、色んな価値観や個性（障がいも含めて）を持つ人たち同士が垣根を無くし、共に生きる社会が望まれています。

言わば、「公共」の価値観も進化し続けており、そういう社会を創って行く役割を期待されるのも、**「先進性」**を担うNPOだと言うことなのです。

■最後に

鯖江は**市民一人一人が主役**の街です。

NPOも、その価値観を共有しながら歩んでいくパートナーのひとつです。

ギリシャ神話でパンドラが開けた箱は様々な災厄を世に広めましたが、箱には「希望」が残されたと言います。

私たちも新たな「希望」を見据えながら、一人一人の個性と価値観を尊重し合える街を一緒に創って行こうではありませんか。

ランドスケープ大作戦カードゲーム

つくれ！きみの宇宙。

ランドスケープ大作戦カードゲーム『SAVE JAPAN プロジェクト SOS!』

▲基本は「色合わせゲーム」
「いばしょ」「生きもの」「レンジャー」のカードで自分だけの「ランドスケープピラミッド」作りを競う！

前号「8歩目」で少しだけお知らせしたように、福井が全国で8つの採択地域のひとつとなり、今年度もわくわくする自然体験プログラムを計画していた「SAVE JAPAN プロジェクト」。しかし、そこに容赦なく暗い影を落とすことになったのが、やはり新型コロナウイルス。

野外とは言え、感染リスクを完全にはぬぐいきれないということで、違う形での事業計画を考える必要が出てきました。

ダッグを組む（一社）環境文化研究所さんと、我々さばえNPOサポートで何回かの打ち合わせを重ねる中、ふと、なにげない思いつきのように提案されたのが「カードゲーム作れないですかね。」というひと言です。

なるほど、リアルな体験活動がムリなら、家族で遊べるゲームの形で、疑似体験とかイマジネーションを膨らませたりする方法があるかもしれない。

そして完成したのが、この『ランドスケープ大作戦カードゲーム』です。

『普通におもしろい』

一応、学習ツール的な一面を持ったアイテムではありますが、子どもが遊んで、普通におもしろくなきゃ、誰もやってくれませんよね。

なので、とにかくゲームとして楽しいことにこだわって作りました！

基本は、カードの上下にある「カラーライン」の色を合わせながら「ランドスケープピラミッド」と呼ばれる「山」を作ることを目指します。

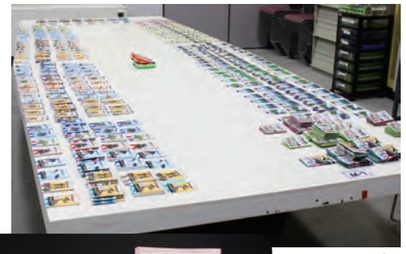
出来上がったピラミッドを見直すと、そこに「いばしょ」「生きもの」そして、環境と生きものの調整役「レンジャー」たちの、**繊細で奥深い関係性が見えてくる**（かもしれない）という、大変フトコロの深い仕上がりとなっています。

『クイズとしても』

「生きもの」カードには、両面に二次元コードが印刷されていて、スマホなどを使えば、その生きものの「マメ知識」を見ることもできます。

カードゲームは難しくても、裏面の「マメ知識」を読んで「この生きものはな～んだ？」なんてクイズにも使えます。これなら小学生になってない子どもさんでも遊べますね。

◀カード到着！なかなか観たことのない風景



▲セッティング（丁合）のために並べられた全カード

▲そして完成！
お手伝いの皆さんにも大感謝です!!

▲カードは全部で86枚！

『詳しくはWebで★』

カードリストやあそび方については公式サイトでご案内中。ゲーム完成までの涙の秘話も読めたりします。

ルールをわかりやすく解説したムービー満載のYouTubeチャンネルも、ぜひご覧ください。

一般に販売されてはいませんが、もし興味のある方は、さばえNPOサポートまでお問い合わせを。

イベントなどへのレンタルのご相談などにも対応します。

コロナ禍でなければ、おそらく世に出ることがなかったこのゲーム。

生きもの好きなら、きっとイラストを見てるだけでも楽しめますよ☆

「ランドスケープ大作戦カードゲーム」のくわしい情報は…

▼公式サイト▼　▼YouTubeチャンネル▼

ランドスケープ大作戦カードゲーム　検索

サバヌシ総会2021 レポート

更新せよ。「市民主役」!!

◀施行５年後と現在の「鯖江市民主役条例」へのアンケート結果比較も紹介

サバヌシ総会2021

主催…サバヌシ総会実行委員会　共催…鯖江市
日時…令和３年３月２１日(日)１３時１５分～
場所…Ｚｏｏｍ／鯖江市民活動交流センター

２０２０年は新型コロナの影響で中止となったサバヌシ総会。今年はＺｏｏｍ(ズーム)とリアル会場とのハイブリッド型で開催です。

学生発案の「鯖江市民は鯖江市の株主＝サバヌシだ！」というコンセプトを貫きながら３回目を迎えた今回は、大人数では集まれない状況ながら、インターネットでの参加を含め、総勢５０名ほどのサバヌシたちが集結しました。

『施行１０年を超えた鯖江市民主役条例』

今回のメインテーマは「鯖江市民主役条例」施行から１０年が過ぎたことから、**「さばえの市民主役のこれまでとこれから」**。

２部構成の第１部では、これまでの"市民主役のまち鯖江"をふり返りつつ、未来に向けて補完すべき点を探ります。

第２部では市長を交えた座談会で、市民主役と市民協働の足下と将来像に切り込みます。

おりしも去年の秋に誕生したばかりの佐々木市政では**「市民主役」**の言葉がどんな意味を持つのか。

実は、それを確かめることも、今回の「サバヌシ総会」の裏テーマだったようです。

『市民主役のサイト完成！』

開催日を前にして、あるウェブサイトが起ち上がりました。

その名も**「市民が主役のまちづくりSABAE」**。

「鯖江市は市民主役を推してるけど、市民主役条例とか、それに関わる活動とかが、わかりやすくまとまったホームページってないよね？」

確かにこれまで、そんな質問や要望がたくさんありました。

今回の総会で、過去の「市民主役」をふり返るためにも必要不可欠！…ということで制作されたこのサイト。

ないものは作る。鯖江市民の行動力の賜物です。デザインや内容を、市民サイドで作りきったことも、全国的には珍しいかもしれません。

『新しい力を持たせたい』

第１部のタイトルは**「鯖江市民主役条例エンパワーメント計画」**。

市民主役条例の第１２条には「わたしたちは、市民の意識や社会の変化に応じて、自主的にこの条例の自己点検や見直しを行うよう努めます。」と書かれています。つまり更新していくことで、この条例に「力を与えること＝エンパワー」ができるということです。

令和２年度は市民主役条例が施行されて１０年目の年。

あのときの未来はまさに今！

これから１０年先の未来には何が求められてくるのでしょうか。

その問いに答える２つの提案が発表されました。

『取り残さないための計画』

ひとつめは鯖江市民協働推進会議からの「市民で創る『市民活動計画』」の提案です。

人口減少、高齢化、産業の厳しさなどの進む中、今後行政の公共サービス縮小は避けられない現実…。

対抗策として、市民が主体的に担う「自助」「共助」のアクションが有効かも知れませんが、そのためには、市民目線での"道しるべ"が必要では？

…そんな思いが「市民活動計画」の元になっています。

そのヒントにもなるのが、国連の掲げるＳＤＧｓ（エスディージーズ＝持続可能な開発目標）の取り組み。

ＳＤＧｓのキャッチフレーズ「誰ひとり取り残さない」は、ひとりひとりを尊重しながら、"わたし"の家族・まち・社会といったコミュニティーを、維持・発展させる視点でも活用できる考え方です。

▶市民協働推進会議の森本さん(左)と楳原さん(右)

行政からの押しつけではなく、様々な市民が、その多様性を活かしながら自分たちで創り上げる「活動計画」。

実現へのハードルはあるかも知れませんが、「市民主役」の未来を切り拓く一歩として、また、市民と「市民主役」の距離感を縮める方法としても、可能性を感じさせられる内容でした。

『子どもを笑顔にする条例』

ふたつめは、にこにこＳＡＢＡＥによる「『子どもの権利条約』条例化」についての提案です。

この条約は、子どもの「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」を基本とした、世界で最も受け入れられている人権条約で、日本も１９９４年に批准しています。

ただ、その存在や内容については、普通の大人はもちろん、教員の間でも浸透していないという事実があります。

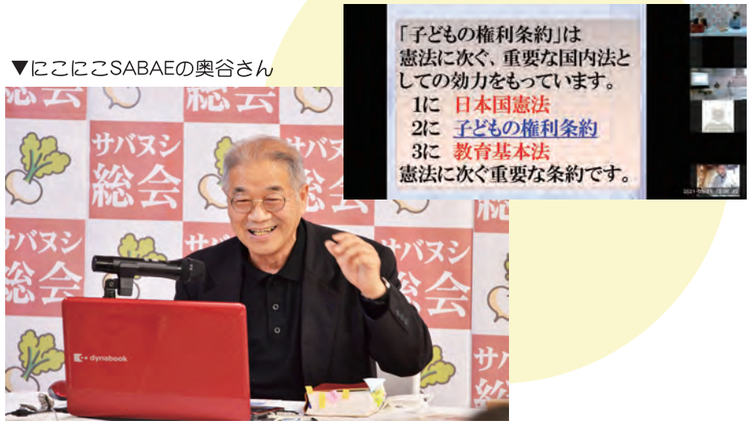
今、子育てや教育の現場で起こっている、虐待・いじめといった問題は、子どもが本来持っている「権利」への意識の低さも原因のひとつ。

みんなが身近に感じる自治体の法律「条例」にすることが、課題解決へのきっかけになるかもしれません。

また、鯖江の子どもたちも、れっきとした「サバヌシ」です。

大人からは「守られる存在」だと思われがちですが、子どもたちが、もっと自分の思いを表現し、自分の意志で地域の活動にも参加できるようになることは、「市民主役」を次世代にバトンタッチするための基盤にもなるはず。

子どもが自分らしく、笑顔で生きていけるまちであることこそが、みんなが笑顔で過ごせるまちの秘訣なのかもしれませんね。



▼にこにこSABAEの奥谷さん

偶然にも、提案の両方ともが、国際的な取り組みとつながっていた第１部。

いや。…と言うより、鯖江の課題も世界の課題も、同じ根っこでつながっているというのが正解なのかも。

実際に市民主役条例に反映されるかどうかは別にして、どちらの提案も、広い視野と深い考えに裏打ちされた、今の鯖江への投げかけでした。

短い時間にギュッと濃縮された発表、ありがとうございました！

えっ、「市民主役所」？

しみんしゅやくしょ

▲リアル会場の登壇者３人
右から、蓑輪実行委員長、
佐々木市長、左は進行の
八田副実行委員長

▶Zoomならではの
リモート座談会

第2部は、サバヌシ総会の蓑輪喜通実行委員長と佐々木勝久市長に加え、リモートで中村正一副実行委員長、子どもや親子のよりよい人生のため活躍する西野有香さんを招いての座談会。

その名も**「ズームイン座談会 in Zoom」**！

様々な人の視点から、鯖江の「市民主役」を掘り起こします。

『市民と行政との共鳴』

座談会のキーワード**「市民主役所」**。

今回の総会で初登場の「市民主役」と「市役所」を合体させた、ダジャレ成分配合の造語です。

とは言え、なかなか味わいが深そう。

内外から「市民力がある」と言われる鯖江でも、市民の力だけで、まちづくりや市民主役が進んでいるわけではありません。行政と市民が共に歩いてきたからこそ、今があると言っても過言じゃない。

蓑輪実行委員長によれば、「市民主役所」のイメージは「行政と市民が同じ方向を見ていくためのしくみ」とのこと。

つまり、市民主役のまちを進化させるため、市民と行政が目的や視点を重ね合わせ共鳴させる「組織」「場所」みたいなカンジなのでしょう。

そんなことを頭の片隅に置きながら、座談会は進んでいきました。

『それぞれのきっかけ』

第1部の提案にあったように、人口も経済も右肩上がりとは言えない時代、市民が地域の公共サービスや意志決定に参加することは、とても重要な要素になっています。

でも「まちのためになにかする」と言われても、なんとなく「人ごと」に思えてしまいますよね。

じゃあ、座談会のパネラーの皆さんは、どんなきっかけで地域の活動に関わるようになって来たのでしょう。

▲中村さんは「サバヌシ」の生みの親

「三重県から福井の大学に来て、最初は他の学校の友だちが作りたいな…くらいで学生団体に入ったのがきっかけですね。」というのは、中村さん。

「その活動の中で、自分で企画運営したイベント（自分のやりたいこと）を実行することが、まちへの貢献にもなっていた。その体験や達成感があったから今があると思います。」

学生時代に「サバヌシ総会」を発案し実現させた中村さんは、その後鯖江に移住して、まさに鯖江市民として『主役』となっている人物。

自己実現（＝自分のやりたいこと）と『まちへの貢献』をマッチさせることは、過去の「サバヌシ総会」で何度も出てきた「楽しくなければ市民活動じゃない！」のフレーズとも通じます。

もちろん、市民のアイデアに行政やコミュニティが共鳴できる寛容さ。その土壌があってこそなのも事実ですね。

一方で、山梨県出身の佐々木市長は「鯖江市民の皆さんが、自分のお金や時間を、普通にボランティアやまちづくりに使っているのはカルチャーショックだった。」とのこと。

中村さんと同じように、鯖江で友だちを増やしたいと始めたボランティア活動などで、自分を自然体で受け入れてくれた人たちと地域コミュニティを素晴らしい財産だと感じたそうです。

「この大好きなまちのためにできることが私にもあるはず。そう思って進んだ先が、自分の場合は政治だった。」

ふたりには、不思議と共通するものを感じます。市外出身というだけでなく、活動に関わる最初のきっかけが、「個人の思い」だったこと。

誰かにやらされるのではなく、自発的な「なにか」で一歩を踏み出し、それがまちへの貢献と重なることで達成感を生み、さらに地域や活動への愛着へとつながっていく…。

このサイクルがうまく回ってるまちって、実はとっても“スゴい”のかも！

そして、ふと思ったこと。

もしそんな土壌が鯖江独自の文化のようなものだとしたら、これは「サバヌシ」として意識しといて損はない！

市外から鯖江に来て活動してくれる多くの皆さんは、もうそのことを強く感じてくれているのかも知れません。

地元民の「ひいき目」かもしれませんが、もしこんな鯖江を「普通」だと思って過ごしている「サバヌシ」が多いのなら、その貴重さを意識するだけでも「市民主役」との距離感がグッと縮まるような気もします。

だって、ちょっと胸を張りたくなりませんか？

それに、きっと1年や2年で作ろうとしても、そう簡単にできる土壌ではないと思うんですよね。

『つながらない市民主役？』

西野さんからは、経験から強く感じる課題も出されました。「市民主役」の意義も成果も認めた上での発言には、参加者の多くが納得していた様子。

▲西野さんの指摘には多くの参加者が共感

笑顔で優しく語られてはいましたが、シビアな現状への提言です。

「色々な事業に参加させもらっていますが、個人的には本当に時間が足りないと思っています。

と言うのも、市民主役に深く係わる方って実は限られていて、いろんな会議やイベントで、同じ皆さんと顔を合わすことが多いんですね。

『市民主役』に関わり続けようとしても個人の負担が大きすぎれば、どこかで限界が来てしまいます。

現状は、ある意味旧態依然とした土俵の上に取り込んで、個人の頑張りに頼って動かしてるみたいなところがあって、これでは新しい人材も集まって来づらいし、社会的な継続を考えても、危ういかなと感じています。」

みんなにとっての「市民主役」のはずが、多くの人の「自分ごと」になっていないことで、一部の人にやることが集中してしまっているのは、私も身に染みて感じていました。

今後の課題については、蓑輪さんは「一生懸命している人と関心がない人の温度差」を指摘し、中村さんは「市民主役という言葉から受けるハードルを下げていく必要性」に言及。

広報や人材発掘といった良く耳にする方法も大切ですが、これからは西野さんの言う「旧態依然とした土俵」を見直して、足もとから造り替えるような発想が必要なのかも知れません。

だったら、何かをひっくり返すような、革命やクーデーターが必要？

そんな気持ちに、あるヒントを投げかけたのは、佐々木市長の言葉でした。

サバヌシ総会2021 レポート

▲佐々木市長の人となりを知るためにも
いろいろと参考になる座談会でした

『解決法…私はひとつしかないと』

出された課題に、自分も同じように感じていると答えた上で、佐々木市長の言葉は続きます。

「解決法…私はひとつしかないと思っていて、それは『語り合う』こと、『対話』することだと思うんです。」

考え方や生き方の根本にあるもののように響いたその言葉。

議員時代も含め、いろんな人たちとことん「対話」してきたという市長。

それでしか生まれない解決法があるという「確信」を伝えようとする発言にも感じました。

「対話」は「会話」と同じような意味として使われますが、「対して話す」と言う字から「意見の違う相手と語り合う」ニュアンスも感じられます。

それがいろいろな価値観を共有し、たとえ結論が自分の意見にならなくても、より多くの人の思いを知ることができる方法だということなのでしょう。

女性、男性、子ども、障がいのある人、ジェンダーギャップのある人…。

鯖江で生活し、そんな違う人生を歩むひとりひとりに共通するのは「鯖江市民＝サバヌシ」であること。

もしそのネットワークが「対話」でつながるのなら納得できる気がします。

もちろん「より早いスピード」「より強いリーダーシップ」を求めて市長に賛成できない皆さんもいるでしょう。

そんな違う価値観の市民が共に生きることが、多様性を大切にする「市民主役」のまちの、あるべき姿だとも思います。

そして、違う考えを「対話」でやりとりする場があることが「市民主役」の命綱のようにも思えてなりません。

『私的なまとめ』

鯖江には他のまちにはない独特のコミュニティやしくみがたくさんあり、会社や家庭以外にも、ひとりひとりが活躍できる**居場所**を作ってきました。

いろんな立場や背景を持った人が、そこで自分や誰かのやりたいことを叶えあっています。

「人生百年時代」とも言われ、自分の「幸せ」への関心も強くなり「幸せ」の形もさまざまになりました。

そしてスピード感のあるこの時代。

新幹線のような速さで進む時代についていきたい人もいれば、散歩したり寄り道をしながらゆっくり歩いていたい人もいます。

そんなひとりひとりが、自分のペースで「居たい」まちを、自分が主役となって作り上げられること。

今回のサバヌシ総会を通じて、たくさんの「居場所」の可能性を持つ「市民主役」の理念は、鯖江市民がそれぞれの人生の「主役」になるための基本だとあらためて感じました。

❀　❀　❀

「サバヌシ総会２０２１」の動画は、この記事でも書いた「**市民が主役のまちづくりSABAE**」のサイトで観ることができます。

ここでは紹介しきれなかった内容や資料のページも公開されています。

この記事に共感してくれた皆さんも、違和感を感じた皆さんも、ぜひ、自分の目と耳で確かめてみてください。

そこでは必ず、未来の鯖江の「市民主役」のヒントが見つかるはずです！

チラシ&ポスターで振り返る

さばえNPOサポートの令和2年度

■この冊子を発行している『さばえNPOサポート』は、今年度もいろいろな事業や活動をしてきました。その記録を、チラシやポスターで振り返ります。

〈SAVE JAPAN プロジェクト2020〉
【2020. 5. 上旬～】めざめよレンジャー！ランドスケープ大作戦

【2020. 8. 22】
YouTubeコンテンツ「いきものネット相談室」収録

【2021. 3. 21(日)】〈サバヌシ総会2021〉
（提案型市民主役事業）

【2021. 3. 16(火)】
〈市民活動でこそ活かせるSDGs〉

【2020. 6. 21(日)】〈井上さんちで里山あそび〉

SABAE NPO SUPPORT

■さばえNPOサポートでは、ここでご紹介した以外にもたくさんの事業に関わってきました。今後とも、ぜひ応援をお願い致します!!

【2020. 12. 下旬～】福井県PTA連合会
〈書き損じハガキ募集＆収集〉

【2020. 8. ～】
〈ベルマーク大募集キャンペーン〉

【～2020. 10. 4(日)】
〈鯖江市長選挙投票促進〉

「OSANPO」編集後記座談会

今回の編集後記座談会は、
“密”を避けて初のオンライン開催。
自宅や会議室など思い思いの場所から、
お気に入りの飲み物を片手に、
画面越しでのんびり語り合いました。

☆それぞれの居場所から

A　皆さん、集まりましたかー。

B　アレ。まだ、FさんとGさんが映ってないですね。

C　オンライン会議が初めてなんで、ちょっと不思議な感じだなぁ。背景も色々変えられるんだよね。青空にお城に、あとピラミッドとかもある。

D　あ、Eさんは、何を食べてるんですか？

E　えーと、チンゲンサイの和え物と…まぁ、普通に晩ご飯のおかず。

F　遅くなりましたぁ！

G　どうも、私もやっと入れました。家事をしながらなので、まずは音声だけで参加させてもらいます。

A　了解！　では、皆さん揃ったところで、初のオンライン座談会を始めましょう。

☆取材が…

A　まぁ、なんやかや言っても、今年は、自分たちにとっても特別な年でした。
コロナウイルスに鯖江市長選挙、取材に関して言えば「サバヌシ総会」はあったけど、各団体さんに話を聞きに行けなかったのは大きかったかなと。

F　そうですね。
Webや郵送のアンケートで現状を伺うことになり、『お散歩してないOSANPO』になっちゃいました。

全員　うまい！

A　会議では一時「コロナウイルス特集号にしようか」なんて話も出てましたもんね。
あと、直接取材に行けなかった分、記事を書けなかった人もいるし。

C　僕もたっくさん書きたかったのに、残念だなぁ～。（笑）

A　わ、嘘つきの顔しとる～っ！

全員　（笑）

E　それにしても、色々なことが変化した年だったねぇ。

C　身近なところでは、会社でも行動履歴の記録を取るとかになって、普通の生活自体がムチャ変わった。

B　私も、新婚旅行にまだ行けてないです。

全員　そーかー…。

☆可能性と挑戦

E　NPO団体も、全国的には運営が大変厳しくなったところがある。お客さんのいる事業を運営してるとこは特にね。

F　アンケート結果を見ると、活動を縮小せざるを得なかったところがやはり多かったですね。
でも、縮小する中でも、出来ることをやっていこう！と、新しい試みにチャレンジしているところも多かったですよ。

D　ですよね。皆さん、前を向いて行こうという意気込みを感じました。

G　今回の座談会みたいに、オンラインでの繋がりに可能性を感じている印象も受けました。うち以外で、みんなが所属している団体さんはどうですか。何か変化はあった？

D　私が所属している団体は、新規メンバー募集が出来ず苦労しました。打ち合わせも、情報のやり取りは基本的にオンライン中心で。
県内メンバーは、集まる人数を少なくして直接打ち合わせもできたんですけど、県外との往来が難しくなって、団体内での情報格差が課題になりました。
前例がないことを実施するのは、やっぱ難しかったです。

E　機会の公平性に差が出来てしまうのは、このご時世だと、仕方がない部分ではあるのかもね。
でも「目標」をどこに据えるかで意識も方法も変わるし、手段の幅自体は広がったんじゃないかな。

☆ライターの流儀

E　そういえばDさんは、今年初めて取材と執筆も担当したんだよね。どうだった？

D　そうですね…とにかく案を練るのに時間がかかりました。
まず自分の思いを書き出すことから始めて、疑問点やポイントを掘り下げていって、そこが大変で。
でも、書く中身が決まってからは早かったですよ。そこはとっても楽しかった☆

『OSANPO』についても、自分なりの理解が深まったかなって。素晴らしい！

A　記事の書き方も、皆さんそれぞれですよね。私は取材時のメモ書きを元に書く古典的なスタイルだな。

B　僕は文章も映像も、起承転結を元にまとめていくタイプかな。

C　あ、確かに去年の記事でもストーリー性感じた。

A　僕は、記事を読んだ人が、どこか一箇所でも「お！」って感じて立ち止まってくれればと思ってまとめていますね。

F　事実を伝えるのはもちろんだけど、ちゃんと自分のフィルターを通して記事を書くのは大切だと思うよ。
「OSANPO」の良さはただの広報誌じゃなくて、取材した相手の「思い」や「ストーリー」を感じてもらうところだし、それにプラスして、記事を書くみんなの感じたことや気持ちが伝わる内容になっているところじゃないかな。
読者の皆さんにも、そう思ってもらえていると嬉しいけどね。

全員　うんうん！（納得）

❀　❀　❀

最初は緊張したオンライン座談会も、あっという間に時間が過ぎます。

慣れないことに億劫になりがちですが、いざチャレンジしてみると世界が広がり、今まで見えなかった新たな発見につながる。
実際に会えなくても、インターネットを通じてメンバーが一つになれる貴重な機会となりました。

多くの団体さんの活動が制限される中、さばえNPOサポートのメンバーも一緒に学び、模索しながら、何かお手伝いができないか奮闘しています。
もちろんオンラインだけではなく、適切な方法で対処した形での「直接の交流」についても、できる限り可能性を探っていきたいと思っています。

これまでと違い、動かないという決断や配慮も重要なご時世。
よければ、皆さんの体験やご意見もお聞かせください。
ぜひ私たちと一緒に、いろんな形でOSANPOいたしましょう。

それでは、また次号で。
一日も早く、皆さんに直接お会いして取材が出来る日が訪れるよう願いを込めて♥

広報メンバー募集!!

あなたもいっしょに『OSANPO』を作りませんか？
人とお話しするのが好きな方、文章を書くのが好きな方、デザインやイラスト作成が好きな方など、ぜひお気軽に事務局までご連絡ください。
待ってまーす！

[ご連絡先]
■さばえNPOサポート事務局
ＴＥＬ：0778（54）7055
Eメール：info@sabae-npo.org

『OSANPO』では、これからも鯖江の市民活動団体さんを、どんどん掲載させていただきたいと思っています。
「ぜひ、私たちのことも取材して！」という団体の皆さんは、さばえNPOサポートまでご一報ください。

『OSANPO～9歩目～』
●2021年3月 初版発行
●発行人：広報委員会
●発行所：認定特定非営利活動法人
さばえNPOサポート
福井県鯖江市長泉寺町1-9-20
TEL:0778-54-7055
FAX:0778-54-7058
E-mail：info@sabae-npo.org
●http://sabae-npo.org/

Copyright(C)2021 SABAE NPO SUPPORT